
僕が綴った詩

二色誠人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が綴つた詩

【NZコード】

N9762V

【作者名】

一色誠人

【あらすじ】

私の一つ目の詩集です。

「此処は僕の気持ちの吐き出し場。僕のいろんな気持ちを綴つた詩」

誕生日を迎えた夜

日付が変わった

今日は特別な日

僕が一つ歳をとる日

今年もまた一つ歳をとつた

だけどまだ大人にはなれない

あと数年したら大人になれる
嫌でも大人になる

昔は早く大人になりたいって思つたけれど、今はなんだか寂しい

今年も一つ歳をとつた

大人に近づいていく

このまま大人になっていく

それで良いの？

このままで良いの？

きっとこのままでは良くないだろう

今できる事を　今しかできない事を　たくさんやつておこう
子供のうちしか出来ない事をやつておこう

遊びも 勉強も　たくさん　たくさん

今しかできない事をして　今しか感じられない事を感じる

そうして 立派な大人になろう

来年の誕生日を迎えるも　僕はまた同じことを思うのだろうか

誕生日を迎えた夜（後書き）

いつからか、「プレゼントを貰える日」という意識から「大人になる日」という意識に変わっていた。

詩人になりたい者の詩

嬉しい時

詩を書き綴ろう

言葉がどんどん綴られて

幸せの詩が出来上がる

悲しい時

詩を書き綴ろう

気持ちは少し落ち着いて

悲しみの詩が出来上がる

怒った時

詩を書き綴ろう

とにかく ありのままの気持ちを

怒りの詩が出来上がる

詩はその時の考え方 気持ちを表すのだろう
ありのままを

充実している時は 充実した詩が

虚無を抱えた時は 虚無の詩が

今の自分を残す 一つの手段

そして もし

それを誰かが読んでくれたのなら

それほど嬉しい事はない

詩人はそう思うのだろうか

詩人になりたい者の詩（後書き）

あつのままを綴つていこう。

輝く世界

嗤いたきや嗤え
僕はゆるがない

目標ができたんだ

今までなんとなく生きてきたこの僕に
やっと目標ができたんだ

それに向かって生きようと 頑張りうとやっと決意で来たんだ

嗤いたきや嗤え
僕は惑わされない

目標も無く ただ生きる毎日まづまらなかつた
毎日が同じで 繰り返しに見えて

今は違う

色がついて 音が透明で 違う世界に来たみたいだ

嗤いたきや嗤え

僕は前を見る

日々進歩で 進んでいくのがよくわかる

僕が変わったみたいだ 違う人間になつたみたいだ

嗤いたきや嗤え

僕はこの世界で生きる

輝く世界（後書き）

僕は変わったんだ。

過去自己嫌悪

過去の自分が嫌いだ

許せない

どうしてあんなことをしたのか
何故あんなことを言ったのか

悔やんでも

過去は過去

自分は自分だし

変えられない

自分を肯定出来たら

認められたら

好きになれたら

楽になるのだろうか

今まだ

自分を肯定できないし

認められないし

嫌いだし

どうしようもなく
もがくばかりだけど

いつか

僕が僕自身を

受け入れられたらいいのに

今日もまた

僕は

僕として生きるんだから

「自分」を殺して生きるよりは

「自分」として生きたい

過去自己嫌悪（後書き）

過去は変えられないのは知っている。じゃあ、未来は僕の手で変えられるのか？

私的恋事情

初めて好きな人ができました
初めて異性を意識しました
初めて女と自覚しました
初めての感情でした

貴方と話せるだけで嬉しいです

貴方と笑いあえて幸せです

貴方に会いたいです

今日のメールの最後

「また明日」

明日は会えるでしょうか

明日が待ち遠しいです

恋なんて 愛なんて 一生わからないと思つていました

お付き合いも 一生縁がないと思つていました

そんな私が こんな私が

初めて異性を 異性として好きになりました

少し遅い 子供になつたような 淡い初恋

私
的
恋
事
情
(後
書
き)

また、明日。

弱者

嗚呼 また男子が嗤つた
僕を嗤つた
一人じや何もできない僕を
ただ嗤うんだ

嗚呼 女子が嗤つた
僕を嗤つた
またありもしない噂を流して
陰で嗤うんだ

これだから

いじめられっ子は嫌なんだ

散々な仕打ちをされても
言い返すことすらできない
そんな弱さを持つた子が狙われて

皆の絶好の標的

他人を貶めて嗤つて

それでもしないと
自分も狙われるから
嫌でも従うしかなかつたり

いじめの現状つて辛いね

嗚呼 世界のどこかで
僕と同じ思いをしている子は……

弱者（後書き）

自分と似ている子を探してしまつのも、当たり前になつていた。

過去人

僕はなんとなく生きてきた
だから意思を持たなかつた
よく考えもせず流れに任せて生きてきたんだ

今は後悔している
だって

今更意思が生まれたから

「こうしたい」「ああしたい」

でも

人に伝えたら迷惑になるかもしけないって
臆病な僕の考え方

人に嫌われる事を極度に恐れる僕の考え方

過去を引きずつて
嫌われたら嫌だつて思うと

何もできなくなる

意思を封じ込めて
表情も無くなつて
笑えなくなつた

過去に縛られて

未来を見られなかつた

その当時は死にたかつたんだよ

でも今は
まだ臆病だけど
過去を引きずつてはいるけれど
温かく接してくれる人がいるから

その人たちの前では 笑える
本当の自分をさらけ出したって良い
僕の新しい居場所は此処だ

過去人（後書き）

笑える幸せ。笑いあえる幸せ。

普通男子と病気女子

いつも仲良くしてくれる男の子
彼は普通の男の子
勉強頑張って バイトして
いつも忙しい男の子

今日もいつも通り
仲良くしてくれて
安心する

だけど

私は

病気

病気ナノ

『私ハ病氣ナノ。心ノ病氣ヲ持ツテルノ』

『ソレデモ貴方ハ、仲良クシテクレルノ?』

『私ハ病氣。病ンデル。普通ジャナイ。ソウ思ウノデショウ?』

『今スグ縁ヲ切リタクナツタデショウ?』

『普通ジャナイカラ』

『……』

本当の事を 本当の姿を

「普通」の彼に告げたら 私はどうなるの

彼はびっくりの

……。

普通男子と病氣女子（後書き）

私ハ貴方ニ好カレテイタイノ。友達テイタイノ。ダカラ、本当ノ姿ヲ言エズニイルノ。

夜旅

夜の散歩

今の僕は旅人だ

何かを探して旅して

今日も田課の夜旅

この時間だけは全てを忘れて

音楽聞きながら

何かを探して

僕はもうすぐ大人になる

それはそれはあつという間にね

それまでに

何かを探して

探してるんだ

朝が来れば

また現実に戻されて

夢も見れずにはいる

せめて それまでの夜の間は

あと数時間したら 朝が来る
太陽を連れて 月よさよくなら
現実を連れて 夢よさよくなら

今日の旅は此処までだ

続きはまた今度

僕は“帰るべきところ”へ

ただいま。

あの母へ、ひつひつ想ひ出の一部なんだ

手を軽く振つて別れた

駅のホームに君の姿はもう無い

僕は電車に乗り込んだ

がたごと ガタガト

電車に揺られて考える

僕はぼんやり考える

今日一日のこと

なんとなぐの反省会

ああ そういえば君は今日笑ったかな

ろくに君を見ていないことに気付く

君の顔 そういうえばどんな表情で話してたっけ

話したこと覚えてるのにな

表情はぼんやりとしか思い出せないや

僕はどんな表情をしてたかな

君は僕を覚えているのかな

同じこと 考えてるのかな

ああ もひ電車を降りなきゃ

あの頃から、むづ思い出の一端なんだ（後書き）

君は僕の表情、覚えているのかな。

僕の知らない君

君の過去を僕は知らない
知りたくもない

だって

僕の知らない君がいるから

僕の知っている君でいてほしい
だって

僕の知らない君が笑つてたら
少し悲しくなるだろう

僕の知らなかつた君が幸せそうに笑つてた
過去のことを嬉しそうに話していた
僕の知らない君の友人と楽しそうにしていた
ちょっと悔しかつた

もちろん僕だけの君じゃない
仕方がない
仕方がないことなんだ
自分に言い聞かせる

それでも寂しさは消えないな

僕の過去はろくでもなかつたから

それに対する嫉妬みたいなものもあるかもしれないけど

醜いこと考えてるなあ

こんな僕は嫌だ

いなくなれ

消えてくれ

君にまともに言えない こんな感情

僕の知らない君（後書き）

当然なことかもしれない。

でも、醜い僕は嫌いだ。

信じる事

僕はある友達を信じた

信じたけど

酷い仕打ちをされた

だから

もう人なんて嫌い

「信じたのに」

そう言つたら彼女は

「信じてって頼んだわけじゃない」

月日は経つて また新しい友達ができた
どうせまた上辺だけなんだろう

たいして信じはしなかつた
たいして期待もしなかつた

でも彼は優しかった
彼女は笑ってくれた

どうして

僕に優しくしたって笑つたって
君の利益にはならない
それなのに何故

またここで信じたら

後で辛い思いをする事になるから

僕は信じない

そう思つてたのに

「君を信じる

そう言つてくれた君たちの目は優しかった

信じる事（後書き）

僕は……信じたい。 そう思つた。

夢

引き出しを開けたら 出てきた一枚の写真
無邪気な顔をした子供の写真だった
これが俺だったなんて
誰が思うだろ？

きっと小学生くらいだろう
大人の自分に想いをはせて かつこじい自分を思い描いた
今の俺は
将来のことには頭を悩ませ 勉強ばかりのつまらない毎日を送っていて
いる

あの頃の俺がこれを知つたらがっかりするだろうな
幼い俺よ
それでも夢は持つておけ
俺が叶えてやるから

毎日つまらなそうに見えるだろう
これでも頑張っているんだぜ
幼いころの夢を叶えるために

お前が望んだかっこいい俺にはなれないかもしね
ごめんな
だけど

夢だけは叶える
叶えるから
お前も頑張つて今を生きろよ

みんながやりたい生徒さんだからね

夢（後書き）

大人の俺は、何を考え生きているのだろう。

いいすれば良い？

悪口の言い合い

噂話

この手の話になると嫌になる

逃げ出しあくなる

話に乗るのも嫌だし

逃げ出したらこの人たちの悪口のネタになる
かといって人を悪く言いたくない
曖昧に誤魔化すしかないのだけれど

何故そんなことを話すのだらつ
話して気が楽になるのか?
すつきりするのか?

「あの人嫌い」

「この人のここが嫌」

私は言いたくない
口を噤つくむ

人の好き嫌いぐらいあるだらつけど

私は言わない
可哀想とかじやない

ただ

言いたくないのだ

いいやれば良い? (後書き)

言わない。 言えなこよ。

臆病な僕の些細な成長

すぐに逃げ出すことばかり考えていた
少し前の僕

嫌なことがあるとわかると

どう逃げるか考え 可能な限り逃げた

結局さ

憶病なんだよ

失敗を恐れて

傷つきたくないんだ

「変わったね」

ある日の放課後

先生に言われた一言

言われてみれば 逃げなくなつた

それだけは成長した

確かに逃げることを考えたり マイナスに考えたりもするけど
実際には逃げなくなつた

「大人っぽくなつたよ」

僕はなんて返せばよいのか分からなかつたけど

ちょっとびり嬉しかつた

臆病な僕の些細な成長（後書き）

少しずつ、大人になるんだね。

拗れた関係

「私には居場所がない」

そう言われた

ショックだった

私のせいで

私のせいで

ゴメン

ゴメンね

ごめんなさい

決して彼女を仲間はずれにしてたとか

嫌に思つた事は一切無い

大切な一人の友達

そう思つていたのに

彼女はそう感じていた

居場所がないと感じていた

私がどう思つてたであれ

彼女はそう感じていた

彼女がそう思つたのは変えようのない事実で

私がそう感じさせてしまったというのも事実

涙がこぼれた

人に嫌な思いをさせた自分に

腹が立つた

ごめんね

そして

それでも私の友達でいてくれますか？

我儘だけど

私はまだ 貴方を友達だと思つてるから

…… こんな私を 許してくれますか？

拗れた関係（後書き）

謝るしかできない。　事実は変えられない。

一重奏

私達三人 同じ所を目指してた
みんなで頑張つていこうつて
最初は明るかつた
希望で満ち溢れていた

そんな私達を見て また一人仲間が増えた
これで四人
嬉しかつた
嬉しかつたんだ

でも最初は気付けなかつた
そんなにうまくいくはずがないってこと
一人 辞めていった

三人になつた
支えあつて頑張つてきた
いろんな壁にぶつかつた
また一人辞めていった

残つたのは 私と途中で入つてきた子だけ
二人 二人だ
最後には 一人しか残らなかつた

それでも頑張つていかなければならぬ
私がしつかりしなくてはいけない
残り一人の子に安心してもらうためにも

「二人になっちゃつたね」

そうだね

私達は二重奏デュオだ

二人で音を紡いでいく

音で人に伝えていく

一重奏（後書き）

人が減つたって、音楽を愛する気持ちは冷める事は無い。
音楽を通して人に訴えていくことも変わらない。

悲壮感

悲しみを胸に沈めた
沈めきれなくて 泣いてしまったけれど

『この悲しみを決して人には見せてはいけないよ』

自分に言い聞かせた
だって この悲しみを知つたら
また悲しむ人がいるから
悲しむのは私だけでいい

涙を拭つて 待っている人の元へ

「おかえり」

嗚呼 君は何も知らないからそつやつて笑つていられる

この胸は悲しみで満ち溢れた

でも

笑つていなきゃ
知られないために
私は笑つた
君の前では笑うよ

一人になつたら
思いつきり泣こう
いつになつたら 涙は止まるかな
悲しみは消えるかな

本当に笑えるのは いつになるかな

悲壮感（後書き）

君には、言えなさい。
笑つてしまいから。

理想の人

心に奥底に沈む 負の感情
普段は隠していた 明るくふるまつっていた
でも君は いつも簡単に見抜いて
僕にこう言った

「君が死んでしまうよ」

君には話してもいい
この感情の一部くらい
受け止めてくれるかい
話しているうちに涙がこぼれてきた

「君の判断は正しかったと思うよ」

そうかい 僕を認めてくれるかい
ありがとう
負の感情は ゆっくりと消えていくかい
そうであれば 楽になるのかい

「君は君のままでいい」

君も辛いをしてきたうに
それでも僕の事を考えててくれた
真剣に 僕のために
僕も 君みたいな人になりたい

人を安心させるような人に なりたい

理想の人（後書き）

僕も人に求められるような人になりたい。

孤独と自由

私のせいで人が私のもとから去つた
だから

残つた君を繋ぎとめたくて必死になつた
嫌われたくない 一緒にいてほしい 独りになりたくない一心で

孤独を知つてしまつた
だから

人と一緒にいられる幸せを失いたくないと必死になつた
君に依存してしまつっていた

もし君が去つてしまつたら
考へると怖くて

君がいなくなつたら
私はどうなるのだろう

でも君を束縛するのは嫌だ
だつて

君が苦しくなるだけだから
私のために苦しんでほしくない

私が嫌なら去つても良いよ
君がそうしたいなら

私は結局孤独なんだと思い知るだけ
君は自由になる

孤独と自由（後書き）

君の為？　いや、 Ireneはきっと、私の為。

自分という存在

君の過去に何があったかは知らないが
なにがあつたのだろう

そのせいかな

君はいつも怯えた目をしてくるよ

なにかに怯えて 避けようとして 独りになりたがっている
少なくとも僕にはそう見える

だが同時に

そんな自分を嫌い 変わろうとしているような時もある

僕もな 昔はそうだった

変わったかつた 自分を変えたかつた
今 変わったかはわからないけれど

自分を変えることって難しいんだぜ
だって

僕の場合

きつかけがなかつたら変わらなかつた 変わろうと思わなかつたん
だからさ

焦らなくていいよ

君は君なんだ

君らしくいいんだ

君でいいんだ

だから

僕も僕なんだ

僕らしくていいんだ

僕でいいんだ

変わりたければ変わればいい

それも君だ

それも僕だ

自分といつ存在（後書き）

自分でいていいんだよね。

負のものたち

暴走する僕のものと思われる感情

いや 暴走しているのは 僕

もう一人の 僕の知らない僕かもしれない

止まらない負の感情の連鎖

考えれば考えるだけ 負の感情 負の考えが思い浮かび

希望がかき消されていく

頭の中は もういっぱいだ

次々に浮かんでくる負のものに

負けてしまっている

きっとそれらが暴走しているんだ

僕の一部が 暴走している

止めたくても 止める術を知らない

早く止めなくちゃ 止めなくちゃ

じゃないと 僕が死ぬ

早く 早く

死んでしまう！

叫んで もがいて

彼は死んだ

いや

彼の心は死んだ

彼の心から希望が無くなつた

それは

負のものたちに心を支配されたから

負のものたち（後書き）

時として心を殺してしまつばかりに恐ろしこものになる。

君と出会ったことを僕はきっと忘れないだろ？

僕と君が出会ったのは
偶然か必然か

それは知らないけれど
出会ったことは事実で

共に笑い 泣き 苦楽を共にしてきた
これからもきっとそういうだろう
だが別れが来る
それは変えられず

君は僕にとって特別な存在だったた
心を開く事が出来た人
だから 僕は君を忘れはしないだろう
いや 忘れる事は出来ないだろう

まだそんな実感は湧かない
ずっと一緒にいられる気がする

出会ったこと

偶然？ 必然？

どちらにでもとれるだろうね

君はどう思うかい？

僕はお互いに必然だったと信じるよ

君とい田舎つたことを僕はもう忘れないだらう（後書き）

答えはどちらでも構わない。それが君の答えだから。

家路

この地面を思いつきり蹴つたら
あの空に向かつてジャンプしたら

僕は地面を離れ

空を羽ばたいていけるんじゃないかって
そんなこと ぼんやり考えてた

そんなこと あるはずないのにね

僕の目の前にあるのは
いつも街並み

僕の住む街

空は夕焼け 赤く染まつてゐる

時機に夜が来る

時機に明日が来る

少しだけ眠たい

疲れているんだろう

早く家に帰りたい

帰つて 友達とメールでもして

良い気分で眠りたい

今日ぐらい 良いじゃないか

いつもと違つたって

家はもうすぐそこだ

家路（後書き）

また明日、家路についたら何じいとを考えるんだらうか。

好き／嫌い

あの時　君のことを嫌いと思つたなんて
どうかしていたんだ

残酷な事を言'づ

真顔の君 笑わない
決して私に言つたわけじゃないのに
違う誰かに向けていつていたのに
それでも 嫌だつた

君のことを嫌いになれるはずが無かつた
結局は 好きなんだ
好きなんだよ

そんな 一面を見てしまつても

君の全てを嫌いになることはできなかつた

逆に　君の全てを愛することもまだできない

微妙な関係だね

君もきっと

私の全てが嫌いなわけじゃないだろ？
私の全てが好きなわけじゃないだろ？

きっと

このままいいんだよね

全てを愛すなんて

当分出来ないもの

好き／嫌い（後書き）

まだ、出来ない。私も君も。

心配性

何度も携帯を開く
そこに表示されているのは いつもの画面
電話も メールも 誰からも来ない
寂しいな

こんな日がずっと続くと
嫌われるんじゃないとか
必要とされてないんじゃないとか
いらぬ心配をしてしまつ

心配性のかもね

今日で5日目

誰からも連絡が来ない
忙しいんだ キツとそうだ
そう思いこもうとしても また心配してしまつ
何かあつたのかな
どうしたんだろう

他人から見たら 笑えるよね
こんなに心配ばっかりして

だつて

心配なんだもの

心配（後書き）

心配するなつて言われたつて心配しあうんだよ。

“特別”

幼いころは

一番になりたくて必死で頑張つてた

そうだろう?

僕だつてそうだ

テストでも カけっこでも

一番になりたかった

だって 一番になつたら
特別になれる気がしたから

「凄い」って言われたかつた

でも残念ながら 僕はなんでも普通だつた

テストも カけっこも

一番になれなかつた

なれるはずがなかつたんだ

だつて

特別ではないから

別に卑屈にはなつてないさ

ただ 残念には思つてた

大きくなつたら

特別なんてどうでもよくなつた

世界は広いって思い知つた

それなのに 何故

君は僕を特別扱いするんだい

僕は君にとつてどんな“特別”なんだい

でも

ちょっとぴり嬉しいんだ

君だけでいい

君だけが“特別”って思ってくれるだけでいい

君だけでいい

“特別”（後書き）

君だから、
いい。

記録帳

ずっと書いている日記
もう何冊にもなる
私の記録帳

最初の一冊目を手にとつて そつと開いてみる
そこには 今よりも汚いけれど 一生懸命書いた字が綴られていた
まだ幼かつた 私の記録

「今日は友だちとあそんだ」

「今日は先生におこられた」

「たのしかった」

「もういやだ」

そんなことあつたつけ
そんなこと思つたんだ

なんとなく笑える

そつと閉じて 本棚へ戻す
あれから何年たつただろう
大きくなつた私
もうすぐ大人になる

まだ書き続けるつもりだ

私の記録

大人になつてもう一度読み返せんだろう

また笑えるんだろう

記録帳（後書き）

今から楽しみだよ。

伝える人

知らないミュージシャンが テレビの中で歌っている
特別上手だとは思わなかつたけれど 彼は必死に歌つて
人に想いを届けたくて 気持ちを届けたくて
歌つているんだろう

僕だつてそうだ

彼は歌 僕は詩

伝える方法は違うけれど 伝えたいのは一緒
人に訴えたい 伝えたいのは一緒

だからかもね

歌つている彼の姿に心奪われたのは

歌が終わつた

ミュージシャンは笑つた
とても嬉しそうに笑つた

僕はただそれを見て

自然と顔が綻んだ

彼はきっと 想いを伝えていける 訴えていける

なんとなくそう思った

伝える人（後書き）

伝えたいという思いがあるのなら。

眠ったのか 眠っていないのか
よくわからない
よくわからない睡眠だった

ずっとと考え事をしていたような気もするし
眠っていたようにも感じる
不思議な睡眠だった

時計を見ると 3時間ほど経過していた
きっと眠っていたんだろう
浅い睡眠だった

ぼんやりする
まだ少々眠たいや
眠つてしまおうか

目を閉じても

先ほどまで考えていた事が頭から離れず
結局目が冴えてしまう

嗚呼

こんなに
こんなにも

暗い部屋

ベッドの中

僕は力無く横たわる

そしてまた 考える

ただ、ほんやつ。

心の傷

誰でもそうだと想つ

心に傷があつて 苦しい思いをして生きている
その傷をみるのは 容易くはないし
その傷を人に見せようとしたしないもの

だけどね

僕は思うんだ

君の全てを知りたい

だから 君の全て

つまり

君の傷も見せてほしい

見たところで 僕が君にしてあげられることは少ないだろう
でも 君の傷を少しでも癒すことができるのなら

共有することができるのなら

それで良い

良いから

僕の傷

見られる自信があるかい

結構痛かつたんだけど

君になら見せられる

だから

信じて良い

お互いに見せ合つて

共有できれば

それで良い

心の傷（後書き）

怖い？　怖い。　だって、自分の全てを知られる気がするから。

無題

この詩に題名など無い
これはただの私の戯言

一つ言つていいかい

今日の君

正直怖かつたんだ

君に支配されるように感じたんだ

君は笑つてた

だけど心から笑つてたかは解らない

それは君にしか解らない

私はその笑いさえ怖かつたんだ

君が怖かつた

初めてそう思つた

それだけ

それだけだ

君は笑つてたのにね

優しくしてくれたのにね

怖いって感じるのが おかしいのかな

私がおかしいのかな

最後に君と手をつないだとき

さつきまで怖かつたのに

何故か安心した

無題（後書き）

やだなあ。 戯言だよ。

氣合しなくては限こよ。

生死

「死ねよ」

死にたいよ

わかってるんだよ

死んでほしいんだろう?

俺だつて死にたいんだよ

わかってるんだよ

でも

でもな

死ぬのが怖いんだ

そうだ

まだ生きたいっていう思いがあるんだ

結局のところ

死にたいのか

生きたいのか

わからないんだ

生きてても苦しい

死んだら楽になるのか

でも

死んだら全てを失う気がして怖いんだ

どうすれば良い?

俺は

俺はどうすれば良い?

答えはどこだ

どうすれば良いんだ

誰か教えてくれ

俺自身はもう なにもわからないから

生死（後書き）

もつ、考へるのも面倒へれどござ。

希望人

すぐ人にを信じる 僕

それのある人は

「素晴らしいことだ」と言い

ある人は

「疑うことを知れ」と言う

僕だつて

僕だつてさ

裏切られたことはあるんだよ

まあ 裏切られたって感じたってことは
信じ切つてなかつたのかもしだれなけれど

でも

信じたい
信じたいんだ

この人こそはつて

だから すぐ信じてしまうのは

僕がその人へ託す 希望なのかもしだれな

人つてさ

良い人ばっかりじゃないけれど
悪い人ばっかりでもない

誰を信じていいかわからない

けれど

僕は多くの人を信じたい

希望人（後書き）

信じる。ただ、信じる。

「曖昧」

曖昧な人間関係を構築

気付けば

友達かどうかも曖昧な人たちばかり

僕のことを本当に信頼している人はいるのか

僕が本当に信頼している人は誰だ

僕のことを本当に好きな人なんているのか

僕が本当に好きな人は誰だ

何もかもが 曖昧

曖昧に生きてきた
適当に生きてきた
だから

これは僕自身への戒め

僕が僕のことを知らない 解らない

「友達」

僕が勝手に友達と決めつけてるだけで
向こうはそう思っていないのかもしれないなんて

これは僕の 僕のための詩

「曖昧」（後書き）

考えていたことも、曖昧になってきた。

恋愛の理由

人を好きになること
それは素晴らしい

時にいる

人を学歴で 見た目で 収入で
お付き合いするかしないか 決めつける人がいる

私はそんな人になりたくない

人を好きになることに 条件なんているものか！

高学歴で 格好良くて 高収入な人とお付き合いしたい理由なんて
自分をより良く見せるためなんじやないのか？

私はそんなことを考えてお付き合いなんかしたくない
ただ

好きな人と一緒にいられるだけで良いじゃないか！

お互いや好きでもないのに付き合うところのは
不幸なことだと思つのだ

なぜ会う理由（後書き）

気持ちを優先したい。 条件だけで決めつけるなんて嫌だ！

今日は寒い
冬の雨が降っている
空は暗い
もうすぐ夜になる

早くお家に入りたい
温かいお家に
でも入れないの
閉め出されたから

僕は悪い子だから
お母さんの言つことを聞かなかつたから
閉め出されたの
外は寒い

早く入れてよ
指が^{かじか}悴んで うまく動かないんだ

体が震えてきたよ

ごめんなさい ごめんなさい

ゆっくりドアが開いた
明るい光が漏れている

「もう入りなさい」

お母さんの声は まだ少し怒っていたけれど
少し心配そうな顔をしていた

「いめんなさい」

僕はただ謝つた

お母さんは 僕の震える体を抱きしめてくれた

物語の後（後書き）

「いやでなあー。 あじがとい。

高校生の放課後

「 まあ食いたいものを食え！」

先輩は半分やけくそのように言つた

ここはファストフード店
時間はもう17時30分
高校生4人で来店
たくさん注文した

ポテトを皆でつまみながら
くだらない話をする

今日の出来事から 愚痴まで
たくさん話した タクサン笑った

店を出れば もうすっかり辺りは暗くなつて
少し寒いな 少し寂しいな

電車の中でも話して
すっかり疲れた帰り道
それでも楽しい
一緒にいられるだけで良い

お別れを繰り返して
最後の一人になった

電車で一人 搖られて
幸せ気分の帰り道

また こんな日があると良いな

高校生の放課後（後書き）

とても楽しかったんだ。忘れない。

冷めた想い

「僕のこと嫌いになつたの？」

そう聞きたいけれど

結局聞けずにある

君からの電話もメールも減つた
返事は前より素つ気ない

会わなくもなつた

君が忙しいのは分かるし

僕も暇じゃない

けれど君の事を考えてしまうんだ

これは僕だけですか？

だつたら悲しいな

今日も携帯電話を握りしめ
そのまま眠りについてしまつ
着信をただ待つて
朝が訪れる

人の心の変化が怖い

僕はそう思う

好きが嫌いになるといつことか

怖くてたまらないよ

嗚呼 着信はまだかな

冷めた想い（後書き）

知ってる。僕の気持ちも冷めていってしまう事もある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9762v/>

僕が綴った詩

2011年11月20日02時13分発行